

ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査 2020年度までの成果

—出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流—

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員
 寺村 裕史 国立民族学博物館准教授
 ベグマトフ・アリシエル ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミートルファン学研究所研究員
 宇野 隆夫 帝塚山大学名誉教授
 宇佐美智之 立命館大学助教
 ベルディムロドフ・アムリディン ウズベキスタン科学アカデミーサマルカンド考古学研究所上席研究員
 ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミーサマルカンド考古学研究所上席研究員

Summary of Excavations at Kafir-Kala in Uzbekistan up to 2020: Cultural Exchanges as Reflected in the Novel Discoveries

MURAKAMI, Tomomi Research Fellow, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
 TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology
 BEGMATOV, Alisher Research Associate, Turfanforschung, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences
 UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University
 USAMI, Tomoyuki Assistant Professor, Ritsumeikan University
 BERDIMURODOV, Amridin Senior Researcher, National Center of Archaeology, Uzbekistan Academy of Sciences
 BOGOMOLOV, Gennadiy Senior Researcher, National Center of Archaeology, Uzbekistan Academy of Sciences

1. はじめに

中央アジアのザラフシャン川中流域(現ウズベキスタンとタジキスタンの一部)は、ユーラシアの東西交流において大きな役割を果たしたソグド人の本拠地であり、重要遺跡が点在している。日本・ウズベキスタン共同調査は、ソグド人の歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目指し、2013年度からカフィル・カラ遺跡において継続的に発掘調査を実施してきた。2020年度は発掘調査が叶わなかったが、2019年度にシタデル(城)の火災層完掘という一つの節目を迎えたことから、本稿では国内外において進めてきたこれまでの研究成果をまとめて報告したい。

2. 遺跡の概要

カフィル・カラ遺跡(Kafir-Kala)は、中世アラビア語史料に見られる「レヴタートにあったサマルカンドの王たちの離宮」にあてられる見方が有力視される遺跡であり、サマルカンド市のアフラシアブ遺跡からおおよそ10 km 南に位置している(図1)。ザラフシャン川の支流ダルゴム運河の南に面して築かれた都市は、約75×75 mの正方形を呈する小高い丘状のシタデルを中心

に、シャフリスタン・ラバドと呼ばれる居住区などで構成され、総面積はおおよそ16 haである(図2)(Mantellini & Berdimurodov 2005)。2019年度までの調査により、シタデルの構造に関して次のことが分かった。シタデルを取り囲む6基の塔のうち南中央の塔はシタデル正門への唯一の入り口として機能していたと推測される。また城壁には矢狭間が備えられ、軍事的機能を有していたことが分かっている。

シタデルの四隅にはそれぞれ塔が配置され、それを繋ぐように回廊がめぐらされている(図3)。シタデル中央には樹木を植えた中庭があり、その北の一段高い場所に壁画を備えたアイワン(大型建物)、さらにその北側奥には5つの部屋が設けられている。部屋の機能が明らかなものとして、R12からは約10個体の据甕と炭化穀物類が出土しており、食料庫として使用されたことが分かった。さらにR12はアーチ状の屋根を持つ2階建ての建物であることも判明した。シタデル北側の中央に位置するR15/16には唯一、床に焼成煉瓦が敷かれており、女神ナナーと人物群像が刻まれた木彫板、宝飾品類が出土していることなどから、王の玉座あるいは祭壇を備えた特別な部屋であったと推測された。この他、貯蔵庫と見られる部屋や、竈を備え

た調理場を有していたことが明らかとなった。

2019年度からはシャフリスタンの一隅、ダルゴム運河に面した地点において試掘調査を実施した結果、城壁を利用した大型の部屋が確認された。出土遺物はそれほど多くないが、シタデル同様に火災層が確認され、壁画断片も出土した。来年度以降にシャフリスタンの調査を進め、建物の構造や性格、火災時期などについて明らかにしていきたい。

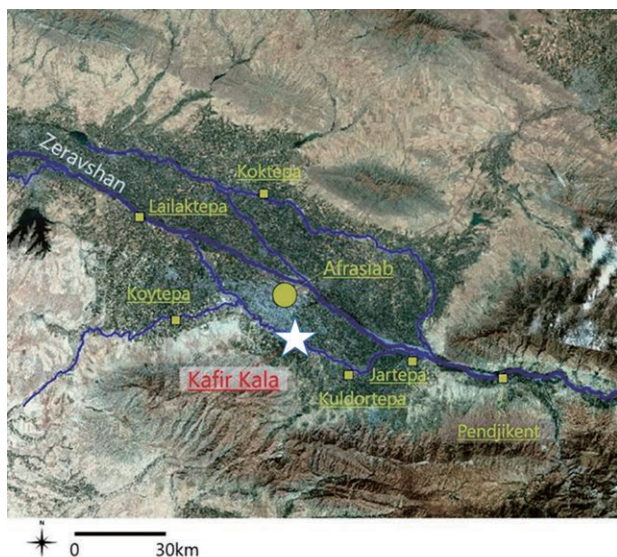


図1 カフィル・カラ遺跡の位置



図2 カフィル・カラ遺跡衛星写真(WorldView-3衛星)
[includes © DigitalGlobe, Inc. , NTT DATA Corporation]

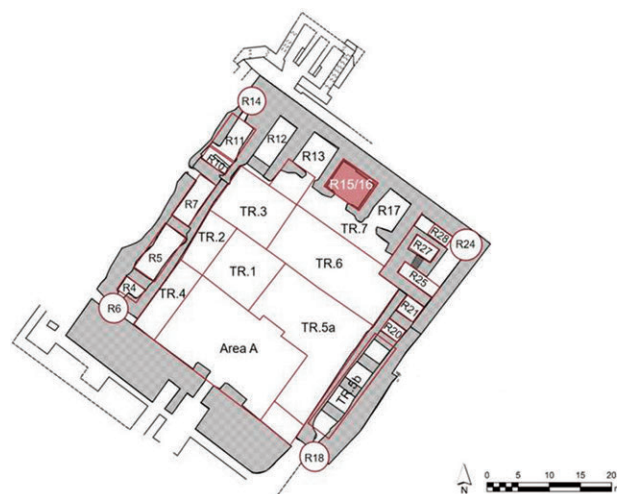


図3 シタデル平面図

3. 主要遺物

3-1. 土器

シタデルにおける出土遺物の大部分を占める土器片のうち、特徴的なものとして、液体保存用と見られる平底大甕、人物や植物文の施された装飾土器などがある。ソグディアナに特徴的な雲母装飾土器には水瓶型や鉢形があり、ザクロもしくはケシ、四葉もしくは花形と見られる植物文が押されている。

土製品としては、人面や動物を模したと見られる用途不明品や、リュトンの可能性があるもの、女神の小像などが確認されている。

3-2. 木製品(図4)

炭化のため状態は悪いが、ほぞ穴が確認できる建築材や、扉の軸、容器など、用途が推測できるものがある。そのうち、R15/16から出土した木彫板は、炭化しているもののほぼ完全な状態で出土し、人物の胸像が連続で彫られた棒状木製品や、家具と見られる木製品も併せて出土した。

木彫板には、女神ナナーおよび様々な供物や楽器を携えた人物群像が表現されている。方形木彫板のナナーは二臂、アーチ型木彫板のナナーは四臂であり、四臂はインド美術の影響を受けた新しい形式を示すとされる。ソグディアナにおける女神ナナーの表現が二臂から四臂へ変化する過渡期を示す可能性があり、南方との文化交流やソグド美術の成立過程を知る上で重要である(ベグマトフ他 2017)。年代は6~7世紀頃と推測されている。これらは現在、保存修復作業が続けられている。

出土木製品の樹種同定を行った結果、木彫板はヤマナラシ属(ポプラ)、建築材の一部にトネリコ属、カゴ状木製品はヤナギ属が用いられていることが明らかとなった(図5)。

なお、R12床面から採取した用途不明の小断片(カエデ属)の年代測定を実施した結果、 1310 ± 20 BP、 2σ の較正年代が660~715 cal AD(73.2%)および743~

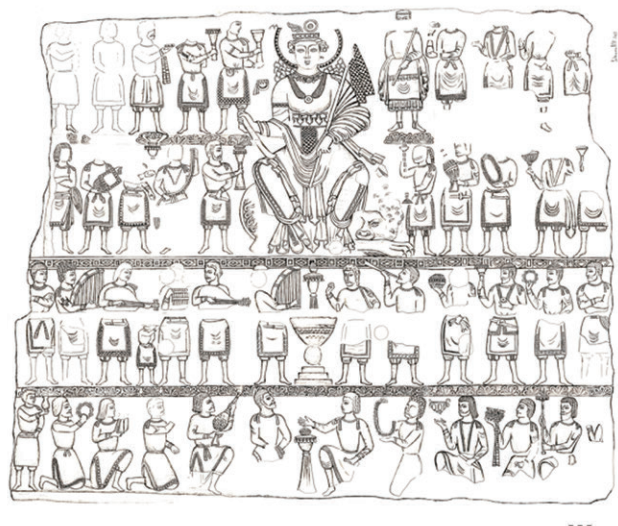


図4 方形木彫板書き起し図

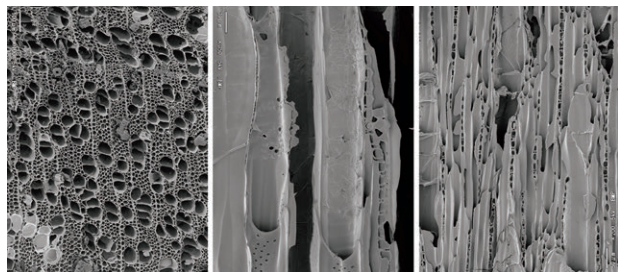


図5 木彫板の炭化木片 SEM 像
(左から木口、柁目、板目。ヤマナラシ属)[分析: 渡邊陽子氏]

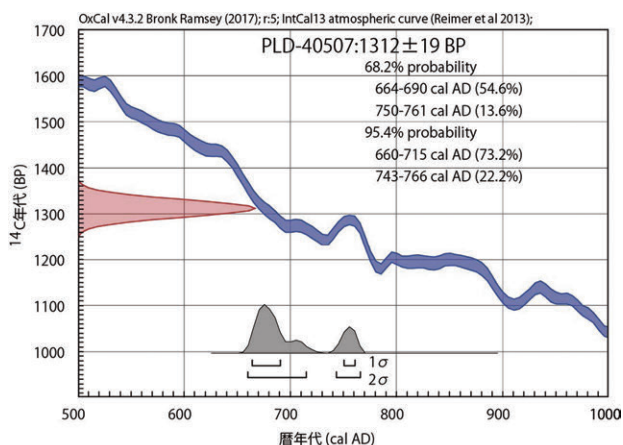


図1 暦年代較正結果

図6 R12床面から採取した炭化木片の暦年代較正結果
[分析: (株)パレオ・ラボ]

766 cal AD(22.2%)で、7世紀後半~8世紀中頃との結果が示された(図6)。

3-3. 貨幣

これまで当該遺跡では、主にソグド貨幣とイスラーム初期の貨幣が数百点出土している。イスラーム期の貨幣は殆どがアッバース朝初期の銀貨であり、内一点はアッバース朝第一カリフの Abul 'Abbas as-Saffah (752-753)の金貨である。出土貨幣からは、イスラーム勢力の中央アジア支配時や、アッバース朝がその勢力をさらに東へ拡大する段階において、カフィル・カラ遺跡が重要な拠点の一つであったことを窺い知ることができる(Begmatov 他 2020)。これらの貨幣はいずれも火災層中から出土したものではない。

火災層中からは主にソグド貨幣が出土しており、その内最も新しい時期のものはタルフン王(700~710年在位)の貨幣である。従って、シタデル全体を覆う火災は710年頃に起きた可能性が高く、712年にクタイバ率いるアラブ軍がサマルカンドを攻撃した歴史的事件と繋がるものと推測される(Begmatov 他 2020)。また、上で述べた AMS の結果もこの推定を支持している。さらに、ササーン朝のペローズ I 世の銀貨(3点)が火災層から検出されていることから、火災層から出土する遺物は5世紀末あるいは6世紀初め頃に遡る可能性があり、木彫り板や数点の封泥の図像にも5~6世紀に遡る特徴が見られる。

3-4. 封泥

これまでにカフィル・カラ遺跡から出土した封泥は約700点に上り、中央アジアの単一の遺跡から発見されたものとしては他に類を見ない量を誇る。封泥の図像は多彩であり、ヘレニズム、ギリシャ・ローマ、ササーンやクシャーナ・ササーン様式の人物像が刻まれたもの、インド美術や、突厥などの騎馬遊牧民の美術の特徴などが見られる。

ヘレニズムやローマの神々にはソグド文字が伴うものがあり、また美術的な観点からも、現地のゾロアスター教の神々を表す際に、これらヘレニズムやローマの神々の表現が借用されたと考えられる。この中には、ローマ神話の出入り口と扉の守護神であるヤーヌスが、ゾロアスター教の創造神であるズルワーンを示すことが指摘され(Berdimurodov 他 2020)、また別の封泥でも、ソグド文字を解読することにより、ヘレニズムの Tyche-Fortuna がオクサス神を表現している可能性が

あることが指摘されている (Begmatov 近刊)。

3-5. 宝飾品(図7)

R15/16の中央に位置する階段状遺構の溝内部から、貴石象嵌の銀製装飾品、銀製獅子面、筒状銀製品、赤石象嵌の金製垂飾、赤石人物面、金製の円形垂飾、金銀リバーシブルの円形垂飾、象嵌材の赤色と緑色貴石、用途不明の銅製品などが出土した。象嵌材の貴石は銀製装飾品のくぼみに一致しており、本体より外れたものと見られる。赤石はガーネットと推測される。針金を溶接しフックを作り出す金製垂飾の技法は、アフガニスタンのシバルガン出土品にも共通する。



図7 宝飾品類

3-6. 織物

これまでに平織物、綾織物、絵緯織物、錦、パイル状織物、編布(もじり編様)、縄状繊維、フェルト状繊維などが出土した。パイル状織物およびフェルト状繊維は敷物として用いられたとみられる。高級織物である錦は、R12の食料庫より穀物とともに出土したことから、袋に穀物等を入れて献上したものかもしれない。ソグディアナにおける錦の発見はムグ山に次ぎ2例目である。錦とフェルトについては材質調査を行っていないが、その他の織物は全て棉であることが分かった。

3-7. 食料

シタデルではこれまでも豆やアプリコットの種などが出土していたが、2019年度のR12の発掘調査において、大量のムギやアワと考えられるイネ科の穀物、円形や細長い形状の豆類、クルミやニンニクなどが炭

化した状態で出土した。穀物類とともに出土した小型壺の中には、ハチミツの可能性のある固形炭化物が残されていた。この他、ヒツジやウシなどの大量の動物骨が出土しており、食用に供されたものと推測される。これらは当時の食生活を復元する上で貴重な発見である。

4. おわりに

ここまで述べてきたように、本年度までのカフィル・カラ遺跡の調査で、様々なことが明らかになってきた。シタデルの火災層については、出土した貨幣などから8世紀初頭のイスラーム勢力の中央アジア侵攻に関連するものと、これまでも推定してきたが、R12床面直上から採取した炭化木片のAMS年代測定結果からも、時期的には矛盾しないと裏付けられたことは大きな成果である。さらには、シャフリスタンに設けた試掘調査区においても火災層が確認されたことから、シタデルだけでなく遺跡全体に火災が及んでいる可能性も出てきた。出土遺物からは、様々な地域との交流や、インドやヘレニズムなどの外来の文化を取り入れながらソグド美術が形成されたことが分かってきた。遺物研究は現在も継続して実施しており、将来さらに多くの成果が期待される。

今後は、シャフリスタンの調査を継続し、建物遺構の検出ならびに炭化物の採取と年代測定を実施するとともに、火災が遺跡内のどこまで広がっているかを確認する必要があるだろう。そのためラバドのどこかに試掘調査区を設けることも検討中である。また、シタデルにおいては火災層より下の層の掘り下げを実施し、カフィル・カラ遺跡の成立がどれだけ古い時期まで遡るのかについて、遺物・遺構両方の考察とともに、カフィル・カラ遺跡の形成過程を明らかにしていくことができればと考えている。

参考文献

- ・ Begmatov A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, T. Usami 2020 "New Discoveries from Kafir-Kala: Coins, Sealings and Wooden Carvings" *Acta Asiatica* 119. The Institute of Eastern Culture.
- ・ Berdimurodov A., G. Bogomolov, A. Begmatov, T. Uno 2020 "Novye nakhodki bulls gorodišča Kafir-kala" *Bulletin of Miho Museum* Vol. 20: 53-104.
- ・ Begmatov A., 近刊, "Cross Cultural Exchange across Eurasia as Reflected in the Sealings from Kafir-kala in Samarkand" *Proceedings of the Second International Congress on Central Asian Archaeology* held at the University of Bern.
- ・ Mantellini, S., Berdimurodov A. 2005 "Archaeological Explora-

tions in the Sogdian Fortress of Kafir Kala.” *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 11 (1-2): 107-132.

- ・ベグマトフ・アリシエル 2017「カフィル・カラ遺跡出土封泥に見られる神々と人物の図像」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』24、203-212頁。
- ・ベグマトフ・アリシエル、宇佐美智之、宇野隆夫、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、寺村裕史、村上智見 2017「カフィル・カラ遺跡のシタデルを覆う火災層—日本・ウズベク調査隊の発掘調査(2016年)—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』60-64頁 日本西アジア考古学会
- ・ベグマトフ・アリシエル、宇野隆夫、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、寺村裕史、村上智見、宇佐美智之 2018「ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡のシタデルを覆う火災層—日本・ウズベキスタン調査隊の発掘調査

(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』62-66頁 日本西アジア考古学会

- ・村上智見、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、寺村裕史、宇野隆夫、宇佐美智之 2019「ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査(2018年)」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』51-55頁 日本西アジア考古学会
- ・村上智見、寺村裕史、宇野隆夫、宇佐美智之、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル 2020「シタデルを覆う火災層の調査—ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査(2019)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』75-79頁 日本西アジア考古学会